「鳥の演劇祭」を評価する
－文化事業の受益者を考える－

五島朋子*

An Evaluation of the ‘Bird Theatre’ Festival
－A study on the external benefits of the festival－

GOTO　Tomoko

キーワード：演劇祭　評価　地域づくり　外部性
Key Words：theatre festival, evaluation, community development, external benefits

Ⅰ．はじめに

2008年９月に，鳥取市鹿野町の「鳥の劇場」（後述）で，「鳥の演劇祭」が開催された。この演劇祭は，特定非営利活動法人「鳥の劇場」が，初めて鳥取県，鳥取市と協働して行う文化事業であり，地域のまちづくり団体とも連携し「鳥の演劇祭実行委員会」[1] を設立して実施された。自治体が税金を使って実施する文化事業であることから，実行委員会では事業評価を実施することとなり，実行委員会メンバーであった筆者が，関係者との協議を重ねながら，実際の評価作業にあたった。

自治体が実施する文化事業を，入場者や入館者数の多寡で評価するのは，言うまでもなく非常に一面的で短絡的なことである。興行的な成功を考えるなら，あらかじめ大量の集客が見込める大衆迎合的な事業を実施すればよいことになってしまう。そもそも，芸術文化への公的支援（税金）の根拠は，文化経済学では，芸術文化が正の外部性をもつ「公共財」の特質があるからとされている。[2] 外部性として，以下のような非利用価値があげられている。（ボウモル＝ボウエン，1994，pp.496-500，Gray and Heilbrun,2001,pp.226-230）本稿で取り上げる演劇活動でいえば，利用価値は，チケットを購入して観劇する人が得る価値であり，非利用価値は，演劇祭が行われていても自ら観劇することのない人にとっての演劇祭の価値ということになる。

・オプション価値（実際に利用しなくても，いつか利用できるという可能性から得られる便益）
・存在価値（歴史的建築のような一度壊してしまうと復元が不可能なものが持つ便益）
・遺贈価値（自分は利用しなくとも，家族や子どもには芸術鑑賞の機会が役に立つ）
・威信価値（国民や地域の誇りとなり，アイデンティティの維持に貢献する）
・教育的価値（芸術は人に活力を提供し，より立派な市民，より豊かな共同体を創り出す）
・経済的価値（芸術活動による，観光や商業などへの様々な経済波及効果）

他の様々な領域の施策と比較可能となるよう，経済波及効果の金額換算については，文化の領域で

＊ 鳥取大学大学地域学部

も近年，経済連関分析やパブリシティ効果[3]の算出によって，さかんに行われるようになった。また，正の外部性を総体として金額換算するものとして，その財を維持するのに支払っても良い額（支払い意志額）を算出する仮想市場法を文化施設に適用する事例研究（垣内2007）も国内で登場しているが，今のところ事例は極めて限られている。いずれも，特定の目的に対し特定の側面を切り取ることが前提であり，文化事業や文化施設の全体効果や長期的な効果を測ることができるわけではない。しかし，芸術文化の公的支援の根拠が，上記の正の外部性にあるならば，数字換算の困難なこれらの非利用価値を描き出す多様な試みこそ，他の施策との差別化を図るためにも必要であろう。

本稿では，「鳥の演劇祭」評価のために実施した各種調査を用いて，まず「鳥の演劇祭」の目標がどのようにどの程度達成されたのかを検証し，それを踏まえ，今回の演劇祭において非利用価値のどのような側面が生み出されたのかを跡づけ，そこから，「鳥の演劇祭」の受益者の広がりを考察する。

Ⅱ．「鳥の演劇祭」実施概要

１．事業の経緯

「鳥の演劇祭」の企画と運営を中心的に担ったのが，ＮＰＯ法人「鳥の劇場」である。劇団「鳥の劇場」は，2006年に鳥取市出身の演出家中島諒人を中心に設立され，同年より旧鹿野小学校体育館と旧鹿野幼稚園舎を活用して，作品づくりや公演などの演劇活動を行ってきた。この活動拠点も「鳥の劇場」という名前であり，「鳥の劇場」は，創造集団である「劇団」と，稽古や公演など演劇活動が行われる「劇場」という場所の両方を指す。当初より，「「わかりやすい」「深い」「一緒に感じ，考える」を活動の軸に，魅力的な作品を作る，演劇活動を通じて社会に貢献する，活動の公共性が広く理解され，認知されること」をミッションとして掲げ[4]，2008年に特定非営利活動法人格を取得した。

拠点となる劇場を持って，自らの劇団作品の創作と上演のほかに，演劇や舞台に親しむワークショップや地域の芸術文化を考えるシンポジウム，学校でのワークショップなど，公立ホールが取り組むような事業を展開してきた。そのような活動から，より幅広い舞台作品や舞台に関わる経験を提供することで，地域における劇場の公共性をより際だたせようと提案されたのが，演劇祭開催である。そのためにも自治体との共同開催が必要であった。鳥取県は，「アーティストリゾート推進事業」に位置づけ，鳥取市では09年の「因幡の祭典」（姫鳥線開通に伴う観光誘客集客事業）のプレイベントとして予算措置され開催されることとなった。なお，「アーティストリゾート推進事業」は，2007年に就任した平井鳥取県知事が掲げる次世代改革の政策項目のひとつである。アーティストが鳥取に定着し，継続的かつ自立して上質な芸術を県民に提供し続けていくこと，また鳥取から全国に情報を発信してすることを目的としており，鳥取県にとって演劇祭は，「鳥の劇場」というアーティスト集団の飛躍の機会となるような支援としての趣旨があった。[5]

２．事業概要

（１）実施内容

「からだでかんじる　そのばでかんじる」をキーコンセプトとし，以下の日程と内容で実施された。

・期間　2008年９月12日（金）～９月28日（日）

・会場　鳥の劇場（旧鹿野幼稚園「スタジオ」・旧鹿野小学校体育館「劇場」）
・主催　鳥の演劇祭実行委員会　　助成　財団法人地域創造
・実施事業と集客実績
　①上演プログラム　６作品　16回公演　延べ観客数　1,580人
　②ワークショップ　３事業　５回開催　延べ参加者数　68人
　③シンポジウム　１事業　１回開催　参加者数55人
　④とっとり体験プログラム　４回開催　延べ参加者数39人
　　全プログラム　延べ参加者数　1,742人

①の作品上演は２つの会場で行われ，観客は同じ日に２作品を鑑賞できる（表１）。②は，「青年団」主宰の劇作家・演出家平田オリザによる「コミュニケーション・ワークショップ」，「にんぎょひめ」演出家による小学生向け演劇ワークショップ，同俳優による小中学生向けワークショップである。③は，早稲田大学演劇博物館の主催による「地方の現場から演劇の未来を考える」シンポジウムで，在京の文化政策研究者らが登壇した。観劇だけではなく，その前後に鳥取の自然や歴史文化を体験できるプログラムとして，④の「とっとり体験プログラム」が４種類実施された。内容は，三徳山登山，青谷で和紙漉き体験，鹿野町法師が滝ツアー，気高町船磯での釣り体験である。その他，開会と閉会に合わせ，自由参加による会費制のパーティが開催され，演劇鑑賞，体験，シンポジウムと幅広いプログラムが実施された。

表１　上演実績及び集客状況一覧

	公演日	公演数	演目 上演団体（所在地）	会場	観客数	設定座席数	入場率
1	9月13・14日	2	にんぎょひめ 世田谷ﾊﾟﾌﾞﾘｯｸｼｱﾀｰ（東京）	劇場	333	376	88.6％
2	9月13・14日	3	ヤルタ会談/隣にいても一人・広島編 青年団（東京）	ｽﾀｼﾞｵ	247	270	91.5％
3	9月18～22日	5	ヘッダ・ガブラー 鳥の劇場（鳥取）	ｽﾀｼﾞｵ	275	450	61.1％
4	9月20・21日	2	私の大切なもの 朗読ひまわりの会（鳥取）	劇場	236	376	62.8％
5	9月27・28日	2	料理昇降機 鳥の劇場（鳥取）	ｽﾀｼﾞｵ	214	180	118.9％
6	9月27・28日	2	火宅か修羅か 青年団（東京）	劇場	275	376	73.1％
							82.7％

（２）集客実績

「劇場」の客席を188席，「スタジオ」を90席として，入場率を算出すると82.7％である。（表１）演劇祭の入場率データではないが，参考までに，開場３年目の2005年度北九州芸術劇場（北九州市立）の自主事業入場率は，ミュージカル，伝統芸能なども含む38事業の平均で82.4％，新国立劇場の07年度「現代演劇公演」計10演目の有料入場率は63.6％などとなっている。[6]「鳥の劇場」で上演している現代演劇は，舞台芸術のなかでも観客規模の小さなジャンルである。ぴあ総研の推計では，現代演劇は，公演回数では年間の舞台芸術公演（ミュージカル，現代演劇，舞踊，古典芸能，演芸・

お笑い）の中で半数を占めるものの，観客数は全体の４分の１にすぎない。[7)]「鳥の劇場」が公共交通でのアクセスが難しい会場であり，上演作品が，現代演劇という大都市においてすら観客数が限られるジャンルであることを考えれば，十分な集客であったと考えられる。

（３）事業費の内訳と収支

全体の事業規模は約1,500万円で，収入のうち助成金が，総務省の外郭団体である財団法人地域創造からの480万円で全体の31％である。これは，地域創造の「地域の芸術文化環境づくり支援事業（単独事業）」という事業枠組みで，地域の芸術文化活動を支援するため，地方公共団体や関連の公益法人等が自主的・主体的に取り組んでいるプロジェクトが対象となる。収入のうち，実行委員会構成員である県と市による事業費が40％，入場料や協賛金などの事業収入が29％となっており，実行委員会として考えれば，国の補助金が31％，事業収入が29％で，自前で調達した収入が６割となるが，国，県，市の公的資金が全体事業費の７割を占め，公共事業として適切な評価と説明責任が求められるといえる。

表２　「鳥の演劇祭」収支：実行委員会資料より作成（単位は千円）

＜収入＞（千円）

県事業費	4,747
市事業費	1,491
財団法人地域創造	4,800
入場料収入	3,360
協賛金	1,070
託児補助金	71
その他	6
収入合計	15,545

＜支出＞

広告宣伝費	1,607
公演事業費	13,936
支出合計	15,543

収支差	2

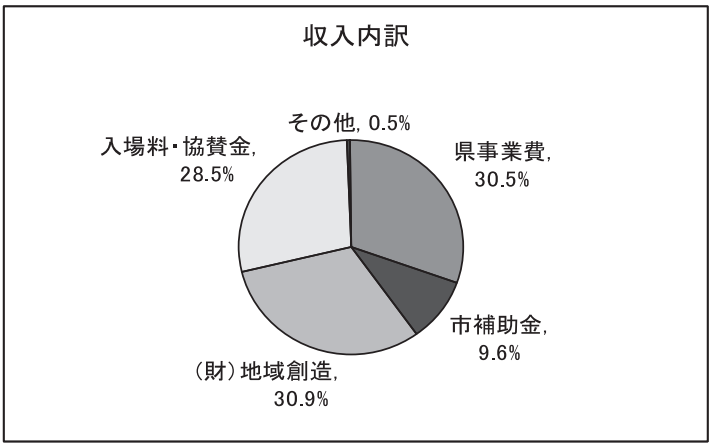

図１　収入内訳

Ⅲ．評価のための調査概要

開催にあたり鳥取県，鳥取市，ＮＰＯ法人「鳥の劇場」の３者がそれぞれの立場で演劇祭の目標を掲げ，これを，演劇祭パンフレットに，「演劇祭に期待すること」として掲載した。このステートメントを素材に，評価に必要な視点を議論しながら，三者の目標を網羅し整理して，以下の６項目に集約した。（表３）この６点を演劇祭の開催目標として，評価の柱とした。

【１】多様で優れた演劇作品に触れる機会を創る
【２】県内外の人の交流，活躍するアーティストや観客・ボランティア，地域住民など幅広い交流を生み出す
【３】行政，地域の芸術団体，ボランティアとの協働による文化事業を創出し，相互の関係づくりを進める
【４】次代の鑑賞者や文化活動者を育成する
【５】芸術文化で地域を活性化する
【６】演劇祭ならではの集中的な文化体験の機会を提供する

表３　各運営主体が掲げた目標と抽出統合した目標番号

	演劇祭に期待すること	目標
鳥取県	（前略）著名なアーティストが鳥取県に滞在し，ワークショップなどにより県民と直接ふれあえる機会を提供することで，県民の皆様に新たな魅力を発見していただく機会となることを期待します。 あわせて，次世代を担う子どもたちも楽しめる内容とし，次世代の活動者・鑑賞者の刺激となるような演劇祭を目指します。	【1】 【2】 【4】 【5】
鳥取市	演劇祭をとおして，演劇の楽しさや深さを味わい，子どもから大人まで感動を共有することができ，地域の活性化はもとより，鳥取市の文化芸術の振興に寄与するものと考えており，「演劇」の新たなる発見と再認識，演劇団体同士及び観客の皆様との「演劇」をとおしての交流が生れるものと考えています。	【2】 【4】 【5】 【6】
鳥の劇場	演劇祭で私達は，普段の活動より多くの人に出会います。たくさんの地域の人，いつもとは違うお客さん，行政の人，他の上演団体の人などなど。劇場が地域住民みんなのための場である時「公共劇場」と呼んだりするのですが，演劇祭が生む広い関わりを通じて，劇場が「公共」であるとはどういうことが，もっと「公共」であるにはどうしたらいいかを深く考え，新しい発見につながればと思っています。	【2】 【3】

以上の目標達成を評価する材料として，表４の①～④のアンケート調査を実施した。その他に⑤ボランティアスタッフへの聞き取り，⑥その他様々な関係者への聞き取りを行った。[8] 目標に対して，どのような視点から評価を行ったかを，表５に示した。

Ⅳ．開催目標に沿って演劇祭を評価する

１．多様で優れた演劇に触れる機会を創る

（１）構成プログラムの多様性

観客アンケートの結果では，57％が演劇祭のプログラムが「多彩な内容となっている」と答えており，公演内容についても，「とても満足」と「満足」をあわせて80％と満足度も大変高い。（図２）

また，実際の上演プログラムには，以下のような特色が指摘できる。

・外国人演出家の作品により国際性を持たせる

・朗読グループの上演により，地元の団体が参加する
・大人も鑑賞できるこども向けの質の高い作品を上演する
・ひとつの劇団が２作品ずつ上演することで演出家の個性の違いを見せる
・夜10時からの上演で新しい観客を開拓する

以上のように，作品内容，上演対象のバラエティに配慮し，6作品16回公演という非常に限られた数の中で最大限の多様性の確保が試みられていたと評価できる。

表４　実施したアンケート調査一覧

	調査対象　と　配布数	実施方法	実施時期	有効回答数 回収率
①	観客・参加者　合計　1,666名 ・演劇公演６公演の観客 ・平田オリザﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ参加者 ・シンポジウム観客	公演毎に，開演時に配布，終演時に会場にて回収	2008年 ９月12～27日	359 （21.7%）
②	出演者・スタッフ　合計48名 （県外からの招聘公演）	小屋入り後配布，公演終了後出発までに劇場事務室にて回収	同上	44
③	ボランティアスタッフ　合計30名 （うち送迎のみ担当10名）	演劇祭期間中，劇場事務室にて配布回収	2008年 9月12～30日	21
④	鹿野町民　対象数　3,824人 高校生以上の町民全員 （08年９月時点鳥取市統計）	45自治会長（または班長）を通じ，各世帯に調査票を配布。同ルートにより回収。	2008年 10月１～19日	1,820 （47.6%）

表５　開催目標と評価視点

開催目標	評価視点	調査内容	調査番号
【1】多様で優れた演劇に触れる機会を創る	構成プログラムの多様性	観客の満足度・意見	①③⑥
	公演内容の卓越性	上演作品の質的評価	＊
【2】幅広い交流を生み出す	観客層の拡大	観客属性	①⑥
	出演者・観客・ボランティア・地域住民の交流の充実	出演者・観客・町民・ボランティアの受け止め方	②③ ④⑤⑥
	経済波及効果の検討	パブリシティ効果算出	＊＊
【3】協働による文化事業の創出と関係づくりを進める	行政・地域のサポーター，ボランティア間の協働の内容充実と推進	協働関係の実情	⑥
		ボランティアの関心と成果	③⑤
		相互関係の深化	⑥
【4】次世代を育てる	子どもも楽しめる作品への子どもの参加	観客属性	①
	公演内容への反応	子どもの満足度	①⑥
【5】芸術文化で地域を活性化する	演劇祭への住民の関与拡大	地域住民の参加・協力	④⑥
		観劇していない町民の認識	④⑥
	観光資源としての可能性の検証	県外客・宿泊・交通・買い物行動の内容	①⑥
	鹿野町の魅力発見機会の拡大	出演者・町民の意見	②⑥
【6】演劇祭ならではの集中的な文化体験の機会を提供する	来場者の行動多様性	観客・参加者の満足度 複数のプログラム体験の実際	①⑥

調査番号は表４に対応している。＊上演実績をもとに判断。＊＊データを集めて算出

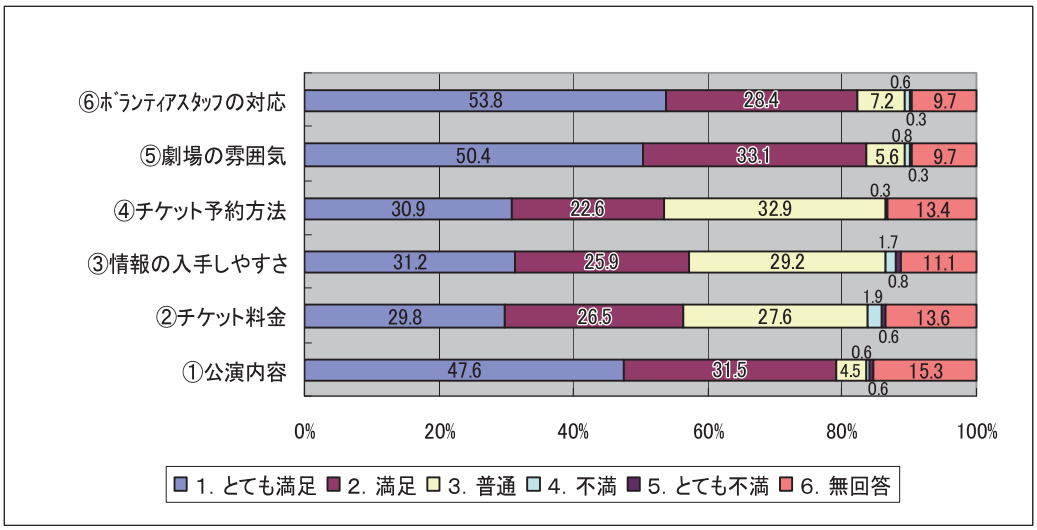

図２　観客の満足度（ｎ＝359）

（２）公演内容の卓越性

招聘された「青年団」による２作品と「にんぎょひめ」は，日本を代表する劇団及び公立劇場が製作した作品である。「にんぎょひめ」は，国際共同による優れた作品づくりに力を入れる世田谷パブリックシアターの製作で，世田谷で既に上演，2009年も各地で上演が予定された作品である。「火宅か修羅か」は1995年初演，劇作家平田オリザの岸田戯曲賞受賞後の作品として注目を集め，「ヤルタ会談」は2003年より何度も再演されている作品である。このように，既に定評もあり，各地で上演を経て一定水準をクリアした上演作品であったといえる。

（３）課題

以上，少ない上演作品数の中で，可能な限りの多様性が確保されており，内容としても評価の高いものが上演され，観客の満足度も高いプログラム内容となっていたといえる。

ただ出演者からは以下のようなコメントがあった。

・演目にもっとバラエティが欲しい

・招聘された県外の劇団が鳥取県の作品を見る機会が欲しい

・「鳥の演劇祭」でしか見られないような海外作品があると良い

招聘された出演者の多くは，舞台活動の経験も長く，また国内外の演劇祭での出演経験があるので，（表13）専門的な視点を持っていると考えられ，これらのコメントにも一定の信頼がおけると思われる。以上の指摘に応じて，内容を充実させ，さらなる多様性を持たせて演劇祭の魅力を高めるには，上演数増が必要である。新たな会場の確保，上演スケジュールの工夫，運営スタッフの充実が求められるが，事業費の拡充を伴う。継続開催するならば，中長期的な視点で開催目標の確認・再検討を行いながら，開催規模・内容についての議論を深める必要があるだろう。

２．幅広い交流を生み出す

（１）観客層の拡大

観客アンケート集計から，県内19市町村のうち，日吉津村，南部町，江府町を除くすべての市町

からの来場が確認でき，全県域から来場者があったことが分かる。また，県外の観客は，アンケート回答者の約13％で，九州から北陸まで広い地域にわたっている。初開催にもかかわらず広範囲に「鳥の演劇祭」の情報が発信されたと考えられる。さらに，観客アンケートでは38.5％が「初めて「鳥の劇場」で観劇」しており，これまで来場したことの無かった新しい観客の開拓につながったことが確認できる。（表12）

また，劇場スタッフや長期にわたり「鳥の劇場」のボランティアをしているメンバーからも，見慣れない観客や，初めて来場した鹿野町民がいたと報告があり，地域，年齢，関心などにおいて新しい観客の獲得につながったと評価できる。

（２）出演者・観客・ボランティア・地域住民の交流の充実

初日と最終日にそれぞれパーティが,「しかの心」[9] を会場に開かれた。会費制で誰もが参加でき，演劇祭に関わった出演者，観客，ボランティア，地域住民らが飲食を共に直接交流する機会となった。また，観劇の合間に,「しかの心」のカフェ，食事どころ「夢こみち」[10] などで，出演者と歓談する観客の姿もしばしば見受けられた。

出演者アンケートのコメントには,「鳥の演劇祭に参加して良かったこと」として,「おかみさんがいい人」「食事が美味しい」とあり，宿泊施設や「夢こみち」の対応が好印象で受け止められたことが分かる。また,「劇場スタッフ，ボランティアのかたがたの劇場や演劇祭に対する愛とホスピタリティをひしひしと感じられた」,「ボランティアの方の雰囲気が良かった」,「地域の方と交流ができたこと」,「人々の暖かさがうれしかった」など，劇場を取り巻く関係者への肯定的なコメントが得られた。一方，宿泊施設の担当者らからは，東京からの演劇関係者たちと気さくな会話を交わしたことが，印象深深かったとのことで，出演者と地域・ボランティアの間には，良好な交流が生れたものと考えられる。

また,「鳥の劇場」の屋外テラスに設けられたカフェでは，開演前，幕間，終演後と，歓談する人であふれ，観客同士の交流の場となった。なかには，野外の雰囲気が良く初対面での会話も自然と生れたという声も聞かれた。

公演以外に，パーティという公式的な交流の場を設けたこと，また劇場内にカフェを設置したこと,「しかの心」「夢こみち」の使い込まれた木造空間，これらの拠点が歩いて数分で行けるコンパクトな町の規模，大切に護られ手入れされた町並みの美しさ，演劇祭と町の持つ魅力が相乗効果となって，出演者から観客まで関わった人たち相互の間には，様々なレベルで交流が促されたといえる。

（３）経済波及効果の検討

今回の演劇祭は，事業規模も1,500万円と小さいので，短期的な効果として把握しやすい，パブリシティ効果のみ算出した。「鳥の演劇祭」に関する新聞記事，テレビ放送をそれぞれ新聞広告，テレビＣＭとして金額換算した。新聞記事は，08年5月から10月にかけて計39本で，記事の大きさに応じて，日本海新聞の広告掲載料を用いた。テレビ報道は4本あったが，このうち時間と内容を確認できた３本について，日本海ケーブルネットワークの広告料金を用いた。また，雑誌などへの掲載が確認できたのは4件で，そのうち鳥取県広報９月号を全戸配布の新聞折り込み金額として算出し，以上を合計すると総額1,289万円である。

これは,県と市が負担した事業費合計630万円の２倍強に及ぶ。今回換算できなかった雑誌掲載記事，インターネットホームページ（「鳥の劇場」，県，市その他）での開催情報掲載，市役所前の看板設置など，経費が発生していない媒体の広告効果を考慮すれば，パブリシティ効果はさらに大き

くなる。県や市にとっては，投入した事業費の倍以上の宣伝効果があったと考えられる。

（4）課題

以上，総じて広く多様な交流と情報発信が行われたと評価できる。ただ，交流の内容については，演劇に強い関心を持って参加したボランティアから，招聘された出演者ともっと密に交流したかったというコメントがあった。若い人や演劇を志す人には，このような演劇祭は，舞台を専門の仕事として活動する演劇関係者に出会って，刺激を得たりや鳥取ではなかなか学ぶ機会のないプロの仕事を知る貴重な機会と考えられる。運営の手伝いを通じ専門的に学べるインターンシップとしてボランティアの一部を募り，演劇祭に人材育成の機能を持たせることも今後考えられるだろう。

３．協働による文化事業の創出と関係づくりを進める

（1）自治体との協働

鳥取県･鳥取市への自治体担当者への聞き取りからは，文化事業を進める協働の相手として，「鳥の劇場」の専門性と実行力を高く評価していることが伺えた。また，自治体担当者も，ボランティアで運営に参加するなど，双方が主体的に関わる雰囲気が生み出されていた。一方，自治体と民間では，事務手続きのスピードが違い，現場での即断が求められることの多い文化事業を円滑にまた効果的に推進するためには，今回のような県に事務局を置いた実行委員会形式が最適かどうか，今後検討が必要であるとの指摘があった。

（2）ボランティアとの協働

ボランティアスタッフは，参加した理由に「鳥の劇場を応援したいから」を上げている人が，21人中の13人と最も多く，聞き取りからも「鳥の劇場」に鳥取での活動を継続して欲しいと強く希望しており，そのために何か応援したいというのが強い動機で参加している。また，ボランティア体験を通じ「鳥の劇場」の運営の実際を知り，劇場スタッフを身近に見て働くことで，「鳥の劇場」の活動への理解と関心を深めたことが聞き取りから伺えた。一方，「鳥の劇場」スタッフも，ボランティアの献身的な働きぶりに感心し，「ボランティアなしで演劇祭はできなかった」と，双方に信頼と理解が育まれたといえる。

しかしながら，双方にとって初めての大きな文化事業であったため，運営にあたっては，ボランティアに仕事が無い時間が生れる，反対に忙しいときにボランティアの数が少ないなど，現場での戸惑いもあった。次回以降のボランティア・マネジメントに生かされることが望まれる。

（3）「鳥の劇場」と地域との相互関係の深化

ＮＰＯ法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会，鹿野ふるさとミュージカル（以降町民ミュージカルと呼ぶ）[11] のメンバーが，送迎ボランティア，集客宣伝などのサポートを行った。まちづくり活動の一環として生れた「夢こみち」が出演者への食事提供，「しかの心」がパーティ会場などになり，まちづくりの成果が演劇祭で活躍した。また，「鳥の演劇祭」実行委員会委員長をＮＰＯ法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会理事長が務めた。出演者のコメントにも，地域が「熱心に応援して下さる」，「地域の人の思いが分かった」，「地元の住民が非常に協力的で良い」，「地元の人の温かい雰囲気」，「そこにいる人々が自分たちのできることをできるだけやって町をよくしていこうという感じがして良かった」というコメントがあり，名実ともに，地域と連携した演劇祭となった。

（4）課題

「鳥の演劇祭」を契機に，「鳥の劇場」と自治体，ボランティア，まちづくり協議会の間には，共に鳥取の新しい文化事業を実施していくという協働関係が生れ，関係者の間には，それぞれの立場

で演劇祭開催についての満足感と信頼感が生まれたと思われる。

４．次世代を育てる

（１）子どもも楽しめる作品への子どもの参加

子どもも楽しめる作品として上演された「にんぎょひめ」のチケット販売を見ると，333人中56人と観客の18％が高校生以下の観客であった。演劇祭の他の上演作品では高校生以下は４～10人なので，子どもが劇場で本格的な舞台を体験する機会の提供になったと言える。また，「鳥の劇場」の通常公演時に比較し，子どもを伴って来場した観客が7.8％[12] から12％（演劇祭アンケート）と増え，若年層の来場者増につながっている。しかし，具体的な目標数値は設定されておらず，これが十分な数かどうかは判断できない。今後，このような観点から評価を行う場合には，これまでの劇場での観客データを踏まえながら，具体的に目標とする子どもの割合などを議論していく必要があるだろう。

（２）公演内容

鑑賞した若年層の回答ではないが，観客アンケートにおける公演内容の満足度は大変高い。会場では，子どもたちは概ね集中力を保って舞台を鑑賞していたようである。また，子どもを伴って観劇した大人からは，観劇後しばらく時間が経ったあとにも，「にんぎょひめ」の話題をふと子どもがもちだすので余程印象深かったのだろう，というコメントもあった。

子どもの芸術文化体験を推進するＮＰＯ法人子ども未来ネットワークへの聞き取りによれば，子どものための本格的な劇場作品が上演される機会は県内では極めて少ないという。訓練された俳優を招き，音響・照明効果を含め演出された本格的な舞台を上演するには経費がかかり，対象となる親子が購入するチケット代に反映するには限度があるので，低廉で簡易な作品上演となりがちであるから，今回公演が次世代を担う子どもにとって貴重な機会であったことは間違いない。

（３）課題

「次代の鑑賞者や文化活動者を育成する」のが，目標のひとつであったが，本来人を育てるには長い時間がかかるものであるし，また演劇などの舞台芸術に親しみ，次の活動者を育てる方法としては，演劇祭はひとつのきっかけにすぎない。そのため演劇祭の評価としては，子どもがどのくらい子ども向けの作品にアクセスしていたのかを確認するにとどまった。今後は，演劇祭の内容については，プログラム，入場料，情報発信などの工夫により公演鑑賞への子どものアクセスをよりしやすくする工夫を重ねると同時に，公演鑑賞以外にも，子どもが気軽に参加できる多様なプログラムを企画し，演劇祭に組み込んでいくことが求められる。評価の観点からは，観劇や参加した子どもたちを長期的にフォローしていく視点が必要と思われる。

５．芸術文化で地域を活性化する

（１）演劇祭への住民の関心

地域の住民の関心や反応はどうだったのか。観客アンケートでは，演劇祭の上演作品に観客とし足を運んだ鹿野町民は，観客アンケート回答者の7.8％（28人）となっているが，町民全員アンケートでは，101人が演劇祭で観劇をしたり関連プログラムに参加している。79.2％は「鳥の演劇祭」の開催を何らか知っていた。アンケート調査まで「知らなかった」人は14.8％にすぎず，鹿野町民に「演劇祭」開催は広く認知されていた。（表６）

表６　演劇祭についてどの程度知っていたか（ｎ＝1,820　ＭＡ）

	%	人数
ポスターを見たことがある	61.9	1126
新聞やテレビ等で見聞きした	32.9	598
知り合いや家族から聞いた	18.4	335
このアンケート調査まで知らなかった	14.8	270
演劇公演を鑑賞したり、関連イベントに参加した	5.5	101
その他	1.3	24
ボランティとして演劇祭の手伝いをした	0.5	9
無回答	6	110
合計	100	1820

演劇祭の目標についてどれが大切と思うかを尋ねたところ，演劇祭観客と町民では支持する項目に大きな違いが見られる。（表７）実際に観劇体験をしている観客は，「生の舞台の迫力にふれる」という芸術そのものに触れることが大切という人が，72.6%と圧倒的に多く，次いで「県や市が芸術文化に熱心に取り組むようになる」と，行政の姿勢が重要という人が48.2%，「子どもたちがワクワクする芸術体験ができる」が43.2%となっている。それに対し，町民では「鹿野町の魅力を広く発信する」が最も高く42.4%で，ついで「大勢の観客が訪れ，鹿野町がにぎわう」が35.8%となっている。芸術にふれる直接の価値ではなく，非利用価値のなかでも，地域の魅力発信という「威信価値」，観光やにぎわいという経済波及効果を支持する割合が高くなっている。

表７　演劇祭の目標についてどれが大切か？（町民と観客）

「鳥の演劇祭」の目標のうち、あなたはどれが大切だと思いますか？（MA）	町民 n=1,820		観客 n=340	
	人数	構成比	人数	構成比
１．鹿野町の魅力を広く発信する	772	42.4	111	32.6
２．大勢の観客が訪れ、鹿野町がにぎわう	652	35.8	99	29.1
３．祭りならではの楽しい雰囲気で、演劇に親しむ	223	12.3	115	33.8
４．子どもたちがワクワクする芸術体験ができる	396	21.8	147	43.2
５．県や市が、芸術文化に熱心に取り組むようになる	292	16	164	48.2
６．生の舞台の迫力に触れる	384	21.1	247	72.6
７．どれが大切か分からない	287	15.8	6	1.8
８．どれも大切とは思わない	63	3.5	0	0
９．その他	22	1.2	16	4.7
10．無回答	193	10.6	22	6.5
計	1820	100	340	100

この演劇祭の目標への支持を，町民ミュージカルへの関与の度合いで，クロス分析を行った。町民ミュージカルは，鹿野町を題材としたオリジナルミュージカル作品を町民自らが演じるもので，20年を超える歴史を持ち，アンケート調査まで町民ミュージカルを知らなかった人は，表８のように5.7%と少なく，町民への浸透は非常に高い。

表８　町民ミュージカルとの関わり（ＳＡ）

	人数	%
ミュージカルのことは知らなかった	103	5.7
知っているが、見に行ったことはない	842	46.3
観客として見に行ったことがある	632	34.7
参加したり、手伝いをしたことがある	142	7.8
その他	7	0.4
無回答	94	5.2
合計	1820	100

町民ミュージカルとの関わりを，より広く演劇や舞台芸術との関わりに置き直してみると，「アンケート調査までミュージカルのことは知らなかった」人は，演劇祭にも無関心，「ミュージカルのことは知っているが，見に行ったことはない」人は，潜在顧客としてこれから舞台芸術に触れる可能性のある人か，もしくは，サイレントパトロンとして，自分は見に行かなくても芸術文化は世の中に必要なものだと支持をする人と考えられる。また，「観客として見に行ったことがある」人は，芸術文化にはある程度関心があり，演劇祭へも観客として足を運ぶ可能性がある人であり，「見るだけではなく，参加したり手伝いをした」人は，運営にも参加する積極的支持層であると考えられる。ミュージカルへの関与から４つのカテゴリーに町民を分類し，演劇祭観客の回答とあわせてしめしたのが，図３である。図のように，鹿野町民では，ミュージカルへの関与が深い演劇祭「積極的支持層」から，「無関心層」まで，割合には大きな差があるものの，支持する目標に大きな違いはなく，「鹿野町の魅力を発信する」という威信価値，「大勢の観客が訪れ，鹿野町がにぎわう」という経済波及効果による便益がイメージしやすく広く支持されている。

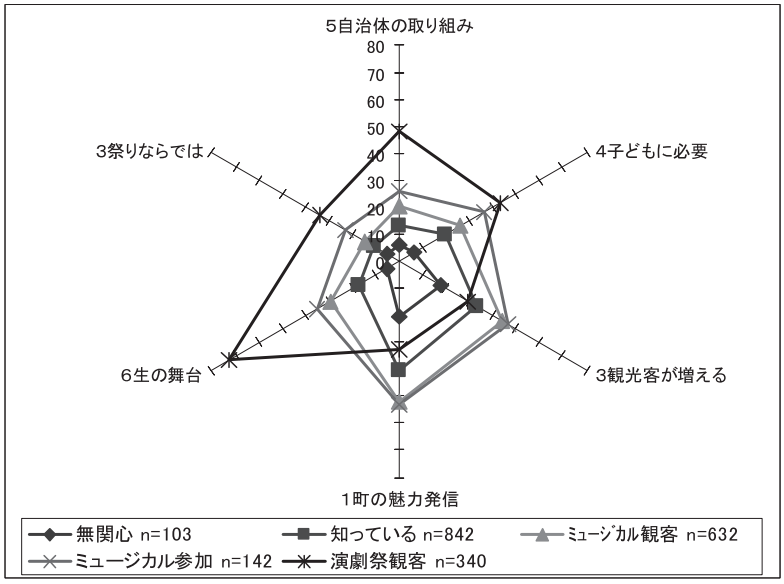

図３　「鳥の演劇祭」の目標に対する支持

表９　演劇祭の目標についてどれが大切か？（上段は人数、下段は％）

選択肢番号		1	2	3	4	5	6	7	8	その他	無回答	合計
町民全体		772	652	223	396	292	384	287	63	22	193	1820
		42.4	*35.8*	*12.3*	*21.8*	*16*	*21.1*	*15.8*	*3.5*	*1.2*	*10.6*	*100*
ミュージカルとの関わり	無関心	21	18	5	6	6	5	32	16	5	10	103
		20.4	*17.5*	*4.9*	*5.8*	*5.8*	*4.9*	*31.1*	*15.5*	*4.9*	*9.7*	*100*
	知っている	341	279	92	169	114	142	170	34	13	62	842
		40.5	*33.1*	*10.9*	*20.1*	*13.5*	*16.9*	*20.2*	*4*	*1.5*	*7.4*	*100*
	観客	329	279	89	165	130	184	70	11	2	35	632
		52.1	*44.1*	*14.1*	*26.1*	*20.6*	*29.1*	*11.1*	*1.7*	*0.3*	*5.5*	*100*
	参加や手伝い	75	66	33	52	37	50	10	1	2	3	142
		52.8	*46.5*	*23.2*	*36.6*	*26.1*	*35.2*	*7*	*0.7*	*1.4*	*2.1*	*100*
演劇祭観客		111	99	115	147	164	247	6	0	16	22	340
		32.6	*29.1*	*33.8*	*43.2*	*48.2*	*72.6*	*1.8*	*0*	*4.7*	*6.5*	*100*

＜選択肢＞

1　演劇祭を通じ、鹿野町の魅力を広く発信する
2　県内外から大勢の観客が訪れ、鹿野町がにぎわう
3　祭りならではの楽しい雰囲気で、演劇に親しむ
4　子どもたちがワクワクするような芸術体験ができる
5　県や市が、芸術文化に熱心に取り組むようになる
6　生の舞台の迫力に触れる
7　どれが大切か分からない
8　どれも大切とは思わない

（２）観光資源としての可能性

観客アンケートでは，35％が観劇前後にどこかしら立ち寄っている。（表12）鹿野町内では，夢こみち，夢本陣，そば道場，おもしろ市，しかの心，橋本牧場，温泉館ホットピアへ，延べ115人が立ち寄っている。これらはいずれも消費活動を伴う施設である。このような町内の立ち寄り施設について，あらかじめきめ細やかな情報を観客に手渡す工夫により，さらなる立ち寄り数の増加が期待できる。また，県外からの観客は，46人のうち半数以上がどこかしら立ち寄っている。上記以外には，鳥取砂丘のほか，やまびこ館，わらべ館，仁風閣などの鳥取市内の文化・観光施設があがっている。遠方からの観客が，演劇祭を機会に鳥取を訪れ，周辺観光地・施設へも脚を伸ばしていることが分かる。観劇スケジュールや公共交通機関の時間とあわせて，演劇祭独自の個性的な情報発信をすることで，市内や県内各所への回遊を促すことが期待される。

県外から招聘された出演者･スタッフの宿泊（鹿野町と吉岡温泉，鳥取市内であわせて208泊）以外に，県内外観客の宿泊は，アンケートの回答・宿泊施設データから控えめな推計で，鹿野町内約40泊，鳥取市内約30泊程度と見込まれる。開催期間，開催内容や規模の設定，宿泊施設の情報提供によって，増加する見込みは十分にある。

今回鹿野町内だけでは宿泊施設が不足し，出演者の半数は，劇場から車で15分の吉岡温泉に分泊した。吉岡温泉旅館組合の協力で，劇場と宿泊施設の間には，送迎バスが用意された。吉岡温泉の小規模旅館は，東京からの出演者・スタッフに，親密な雰囲気が好評であった。大型旅館が撤退した吉岡温泉では，近年若手や女性の担い手たちによるまちづくりの気運が生れている。いんしゅう

鹿野まちづくり協議会によれば，今回の演劇祭が，鹿野と吉岡との間に新たな観光連携を図っていく最初の一歩となったとのことで，今後の展開が注目される。

（3）鹿野町の魅力発見機会の拡大

出演者アンケートを見ると，演劇祭に参加して良かったこととして，「鹿野町を知ったこと」，「こんな町を知ることができてうれしい」，「鹿野町の魅力を知ることができた」とあり，これまで鳥取に来たことはあっても，鹿野町のことは初めて知り，良いところだという印象を持ったことが分かる。さらに鹿野町について尋ねると，「町並みをもっとゆっくりみてみたい」，「ゆっくりとした時間が流れ出る町」，「静かな町，美しい空，豊かな緑と水」，「のどかな良いところ。ゆっくり観光したい」，「静かな町のたたずまいに魅了された」，「ゆっくり安らげる」，「品というものが当たり前に存在している」，「自然や古いものを大切にしていて素敵」，「静謐・清潔」，「雰囲気がよい」，「水がとても美味しい」，「やさしいところ」，「とても心がリラックスした」などの賛辞がたくさん上がっており，「是非また来たい」と結んでいる出演者も多い。

また，鹿野町外から参加したボランティアも，鳥取県内に居住してはいてもこれまで鹿野町のことはほとんど知らなかったと言い，今回参加してみて，町並みを維持・手入れしてきた町民の町への思いと，まちづくり協議会を中心に町民が応援・協力する演劇祭の様子に感動を覚えている。また，県外の観客の中には，インターネット上で体験や感想などの情報発信を行っている。その中で予期せず知った鹿野町の良さを伝えているものも見られた。演劇祭は，これまでの鹿野町の観光やイベントでは捉えられなかった人の関心を惹きつけ，鹿野町の魅力発見とその発信に大きく寄与したと言えるだろう。

（4）課題

「芸術文化による地域の活性化」は，曖昧で広がりがある言葉である。今回の評価では，初めての演劇祭開催であるため，まず「地域住民は演劇祭を知っているのか」という住民の関心，新しい「観光開発の可能性はあるのか」という観点，そして「鹿野町の魅力の発見・発信」を「活性化」の現われと考えて成果を見てきた。いずれも，継続的に演劇祭を開催することによって，変化が期待される点だが，また「活性化」そのものも，継続開催される中で意味合いが変わってくるであろう。「芸術文化による地域の活性化」という目標で，具体的に地域の何がどのように変わることを目指しているのか，あらためて，開催関係者で議論を深め，きめ細やかな指標を検討していくことが必要であり，そのことを通じて，地域における演劇祭そのものの意義がより明確になると思われる。

6．演劇祭ならではの集中的な文化体験の機会を提供する

（1）来場者の行動の多様性

午前中に「とっとり体験プログラム」，午後から２作品を観劇という１日の過ごし方が提案された。延べ39名が「とっとり体験プログラム」に参加しその後観劇した。体験プログラムの内容もオリジナルで充実していると参加者には好評で，観劇とあわせて地域の自然や伝統文化を体験する演劇祭の企画内容は秀逸であったと評価できる。しかし，その充実した内容が参加してみないと分からなかったこともあり，参加人数が少ないプログラムもあった。今後は，内容の告知に一層の工夫が求められる。

１日に２本の作品が観劇できるというプログラムにより，公演間の時間（１時間半程度）が，この演劇祭らしい過ごし方や交流の機会を創出したと言える。たとえば，公演間の時間を過ごす観客で，劇場の野外カフェはにぎわった。幼稚園の親密な雰囲気の空間が，なごやかな歓談を引き出す

のに貢献したと思われる。また，「しかの心」には，劇場のカフェからあふれ出た観客や，休憩時間中の出演者やスタッフがおり，その間に会話が生れていた。しっかりと楽屋が整備され，人混みの雑踏にある大都会の劇場では起こりえない状況である。幕間に，町並み散策に出かける人もあり，劇場の中で現代演劇を楽しむだけではなく，周辺の歴史的な町並みも共に味合うことができた。訪れた観客にはこのように，観劇以外の重層的な楽しみが提供されたといえる。

（2）課題

「演劇祭」独自の特色を，今回は，「観客が集中的な文化体験ができたのか」という観点から，来場者の実際の行動で評価しようと試みた。使われなくなった体育館と幼稚園を使った劇場の雰囲気，コンパクトな歴史的町並みとが相互に引き立て役となって，双方の魅力を発揮したのが，「鳥の演劇祭」の大きな特色であったことが指摘できる。

この特色を十分に生かしながら，次の開催にのぞむことが肝要であろう。

7．「鳥の演劇祭」評価のまとめ

以上，「鳥の演劇祭」について，開催目標に沿って，その成果と課題を振り返った。開催目標の多くは，今回の実績のみでは成果が測れない項目も多く，また，「次世代を育てる」や「地域の活性化」は，そもそも短期的には結果がでない目標である。その意味で今回の評価作業は限定的なものでしかないが，一方，「鳥の演劇祭」の多様な可能性を示すことになったのではないかと思う。

単体で行われる舞台公演と比較して，スペシャルイベントとしての「演劇祭」は，以下のようなメリットをもたらすことができると考えられる。[13)]

・新しい観客を開拓できる
・広く注目を集めることができる
・ニュースになりやすい
・観光に結びつきやすい
・新しい作品を提供できる
・より多くの助成金や支援を得ることができる
・地域と訪問客の間に新しい関係を創り出す
・地域の個性や場所の特質を引き出す

前節までの評価作業を振り返ってみると，「鳥の演劇祭」においては，これらのメリットが網羅され，効果的に現れたと言える。「演劇祭」や「フェスティバル」と銘打たれていても，こうした特色を部分的にしか反映できず，閉じられた劇場空間の中で，特定の限られた観客だけを受益者とする「演劇祭」も多い。「鳥の演劇祭」は，鹿野町の町並みとそのまちづくり活動，「鳥の劇場」という「劇団」と「劇場」，この4者の相互関係を中心に独自の特色を生み出しつつ，「演劇祭」が可能とする多様なメリットを生み出すことができた。

近・深　演劇祭との関わり　浅・遠

演劇祭との関わり			具体的内容
劇場内	運営・創造集団		NPO法人鳥の劇場
	積極的支持者 ポジティブ・パトロン		演劇祭ボランティアスタッフ
	顕在顧客	積極的観客	サポーター会員
		固定客	必ず来場するリピーター
		観客	たまに、誘われて、見に来る観客
劇場未踏	潜在顧客	鳥の劇場活動支持層	このまま鹿野で活動して欲しい
		芸術関心層	ミュージカルを知っているが観劇していない
	無関心層	芸術未体験層	ミュージカルを知らない 演劇に関心がない 鳥の劇場を知らない

図4　演劇祭と人々の関わり

V．鳥の演劇祭の受益者

演劇祭開催目標に沿った以上の評価検討を踏まえ，改めて「鳥の演劇祭」の受益者の広がりとその便益の内容について考察する。演劇祭との関わりの遠近で，演劇祭に足を運ばない無関心そうも含めて図4のように位置づけた。[14)]

演劇祭の上演作品を観劇した人は「顕在顧客」であり，このような文化事業の最も分かりやすい直接の受益者である。しかし，評価作業で見てきたように，これらの観客は，演劇祭の中で作品鑑賞という直接の便益だけではなく，劇場では観客相互，演劇祭関係者との交流があり，鹿野町の魅力に気づくなど，演劇祭が生み出す，幅広い社会的な価値を得たと考えられる。

では，演劇祭の作品を観劇せず，会場に足を運ぶこともなく，まったく関心を持たなかった，無関心層にとってはどうか。5（1）で見たように，「鳥の演劇祭の目標のうちどれが大切だと思うか」に対する，演劇祭観客すなわち「顕在顧客」と「無関心層」の回答には，大きな違いがあった。町民では，町民ミュージカルへの関与の度合が高いほど，選んだ項目の割合が高くなっているが，支持する目標項目の順位が大きく変わることはなく，「演劇祭を通じ，鹿野町の魅力を広く発信する」という「威信価値」と，「県内外から大勢の観客が訪れ，鹿野町がにぎわう」という経済波及効果が支持されている。とくに「演劇祭を通じて鹿野町の魅力を広く発信する」という目標については，パブリシティ効果も含め，充実した成果が得られ，「威信価値」については，演劇祭無関心層に対してもある程度分かりやすい価値を生み出したと考えられる。

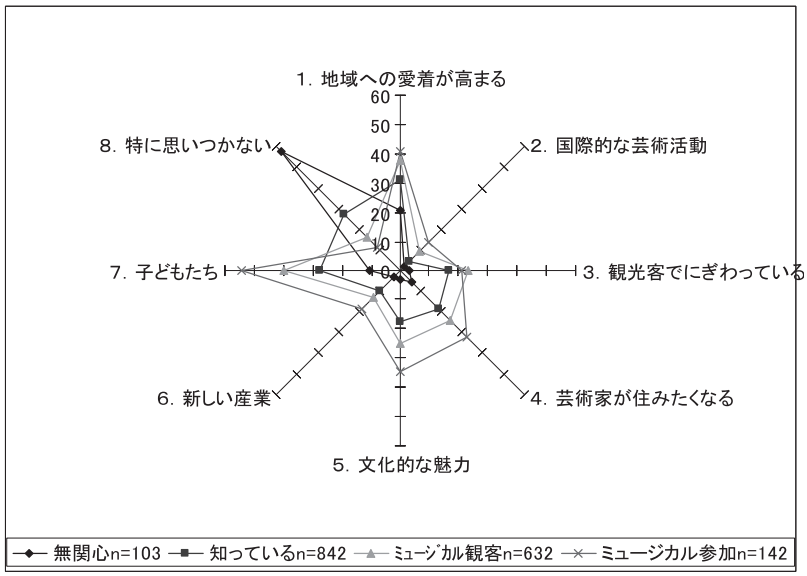

図５　演劇祭継続開催による将来の鹿野町は？

また，「演劇祭が継続的に実施されることで，将来，鹿野町がどのようになると良いか」という，芸術文化によるまちづくりの将来像について尋ね，同様に町民ミュージカルへの関与の度合いで検討した。（図５）町民ミュージカルに参加したり，観劇するなど，実際に生の舞台に触れている町民では，「子どもが芸術文化にふれることができる」という，「教育的価値」が第一に支持されている。鹿野町を担う次世代に必要な営みとして，演劇祭は受け止められている。また，ミュージカル観劇の体験がない町民にも，自分が鑑賞しなくとも「子どもが芸術文化にふれるのは大事だ」と，一定の意義を認められていることが分かる。ミュージカルのことすら知らなかった人は，まちの将来像についても「特に思いつかない」と６割近くが答えているものの，「地域への愛着が高まる」という「威信価値」には，他の項目よりも高い割合の支持がある。このように，舞台芸術にまったく関心がないと思われる人にとっても，演劇祭は「町に対する誇りや愛着」といった「威信価値」を持っていると考えられる。

表10　演劇祭の継続と鹿野町の将来像（%）

ミュージカルとの関わり	1	2	3	4	5	6	7	8	無回答
無関心n=103	20.4	1.9	2.9	5.8	2.9	2.9	10.7	57.3	6.8
知っているn=842	31	4.5	16.7	18.5	17.3	10.1	27.8	27.3	7.2
ﾐｭｰｼﾞｶﾙ観客n=632	37.8	9.2	23.3	23.9	24.8	13	40	16	7
ﾐｭｰｼﾞｶﾙ参加n=142	40.8	13.4	21.1	32.4	34.5	19	54.2	11.3	3.5

＜選択肢＞

1．町民の地域への愛着が高まる
2．国際的な水準の芸術活動が行われている
3．優れた芸術家が活動することで、観光客でにぎわっている
4．芸術家が住みたくなる町として、鹿野町が知られるようになる
5．文化的な魅力にひきつけられ、町外からの移住が増える
6．芸術活動により、新しい産業が発展している
7．子どもたちが、いつでも優れた芸術文化にふれることができる
8．特に思いつかない

演劇祭の企画運営の中心を担った，ＮＰＯ法人「鳥の劇場」も本事業の直接的受益者といえる。そもそも鳥取県は，演劇祭にアーティストリゾート推進事業という枠組みを与え，地元アーティストである「鳥の劇場」の飛躍の機会として事業費を措置した。「鳥の劇場」のメンバーにとって，場を持ち「演劇祭」のホスト役となるのは，初めての経験であり，実践をとおして専門的なフェスティバル運営のノウハウを高めていく学習の機会となった。また，県や市など自治体と連携して実施したことで，県･市広報での全面掲載や全戸配布など，独自の公演時よりも幅広い広報が可能となり，鹿野町にある「鳥の劇場」の存在感を高めるような，強力で広範囲にむけた情報発信の機会となった。「鳥の劇場」のフェスティバル運営能力については，招聘劇団からの高い評価に，また情報発信の効果は，新しい観客，広範囲からの集客が根拠としてあげられる。

ボランティアとして関わった人たちは，演劇祭を積極的に支持し，運営にも協力するポジティブ･パトロンである。彼らにとって演劇祭は，普段の生活では出会う機会がないような年齢・職業・立場の人たちと，濃密な共同作業をする時間となり，他では得られないコミュニケーションや議論の場となった。観劇や「鳥の劇場」の活動を通じ，日常を離れて年齢・立場の異なる人と議論する中で，さらに，自分自身を見つめなおす機会につながった。ボランティアへの聞き取りでは，20代から30代の若い人たちが，非常に深い体験と思索の機会となったと語っている。

以上のことから，運営の中心であった主催者はもちろんのこと，まったく関心がなかった町民に対してまで，演劇祭は多様な価値を生み出しつつあるといえる。なかでも，演劇や舞台に関心のない町民には，地域の誇りや愛着を生むといった精神的象徴的な意味合いの「威信価値」が，分かりやすい便益として認識されていると考えられる。また，これまでの芸術文化体験の有無が，芸術文化そのものの価値に対する受容だけではなく，正の外部性の受容についても，大きく影響することが伺えた。

このような「町への愛着や誇り」といった「威信価値」への町民の志向が，これまで鹿野町がまちづくり活動を積極的に進めてきたという実績と関わりがあるのか，あるいは一般的に分かりやすい外部性としてどのような地域や芸術分野でも共通するものなのか，つまり地域特性によって文化事業の正の外部性の受け止められ方に違いがあるのかどうかまでは，今回は検討できなかった。また，「鳥の演劇祭」が継続的に開催されることによって、正の外部性のなかの他の価値がより強く受容されることも大いに考えられる。数年後に改めて町民全員アンケートを行うことも視野に置きながら，今後の研究の中で考察を重ねいきたい。

注

１　実行委員会構成メンバーは，ＮＰＯ法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会理事長，株式会社代表取締役，鳥取県文化観光局長，鳥取市企画推進部文化芸術推進課長，ＮＰＯ法人鳥の劇場代表，銀行支店長，鳥取大学准教授の７名である

２　外部性とは，消費における非排除性や非競合性を指し，前者は費用負担をしない人がその便益を受けることを排除できないこと，後者は誰かがその便益を受けていても他の人が同時に便益を受けることが可能な性質のことである。非排除性の例としては国防，非競合性の例としては公園などがあげられる。（片山2002，ｐ71）

３　産業連関分析は，文化事業に対してかかったコストがどれだけの産業に影響を及ぼして売り上げを出し，雇用を創出したかをもとに，経済波及効果を算出するもので，大規模な投資を伴う事業に用いられる。パブリシティ効果は，新聞やテレビなどのマスメディアに報道された分量を，同じスペースや時間を正規料金で広告として掲載・放送したしたと想定して金額に換算する方法で，いずれも短期的な経済インパクトの測定に向いている。

４　「鳥の劇場について」鳥の劇場発行より。

５　http://db.pref.tottori.jp/yosan/shin20Yosan_Koukai.nsf/（鳥取県ホームページ）

６　「北九州芸術劇場事業評価調査報告書３」2006年3月，p4，及び「平成19年度事業報告書」財団法人新国立劇場運営財団より。

７　ぴあ総研（2006）pp.74－80

８　ボランティアへの聞き取りは，以下の10名に対して行った。20代女性・団体職員，20代女性・大学院生，20代男性・大学生，30代女性・公務員，30代女性・無職，30代女性・団体職員，30代男性・公務員，40代男性・団体職員，50代女性・無職，60代女性・無職。⑥の関係者聞き取りは，鳥の劇場スタッフ8名，自治体担当者5名，鹿野町および演劇祭関係者９名，その他５名の協力を得た。

９　2007年に住民出資で設立されたまちづくり会社「サラベル鹿野」が，築76年の木造建物を買い取り「しかの心」と名付けて，展示・交流機能をもつコミュニティースペースとして運営している。一角には，カフェが設けられている。

10　「夢こみち」も，まちづくりの具体的な活動のひとつとして，空き家を活用して始められた食事処で，2004年より運営されている。

11　1982年の「鹿野町民音楽祭」を契機に始まり，現在は毎年秋に，町民参加型のオリジナルミュージカル作品を上演している。当初は，旧鹿野町の事業であったが，鳥取市合併後にも引き継がれ，鹿野町民音楽祭実行委員会により開催されている。

12　2007年５～7月にかけて行った，鳥の劇場観客アンケート調査結果より。

13　Frey（2004），Yeoman, I ed（2004）

14　吉本（2003）の公立文化ホールと観客の関係を参照した。

参考文献

ボウモル，W.J，ボウエン，W.G『舞台芸術――芸術と経済のジレンマ』池上惇，渡辺守章監訳，芸団協出版，1994年

Frey, Bruno “Special Exhibitions and Festivals: Culture's Booming Path to Glory”，*Arts and Economics*，Springer，2004

Frey, Bruno “Cultural Economics” CESifo DICE Report，2009

衛紀生「芸術文化振興のマーケティング戦略とは何か」『公立文化施設のマーケティング戦略』社団法人全国公

立文化施設協会，2004年
衛紀生，本杉省三『地域に生きる劇場』芸団協出版部，2000年
垣内恵美子『文化的景観を評価する』水曜社，2005年
垣内恵美子「文化施設の社会的便益評価―りゅーとぴあを事例として―」『都市計画論文集』(社)日本都市計画学会，No.42-2，2007年
神山典士「演劇の道を求めて地域へ―町衆と劇団の新たなパートナーシップ」『地域創造』第24号，2008年
片山泰輔「文化経済学と文化政策」『文化政策を学ぶ人のために』世界思想社，2002年
五島朋子「劇団「鳥の劇場」観客アンケート調査報告」鳥取大学地域学部附属芸術文化センター，2008年
Heilbrun and Gray，The *Economics of Art and Culture* Cambridge University Press，2001
中川幾郎『文献時代の自治体文化政策』勁草書房，2001年
中島諒人「地域社会の中での自立と世界への発信」『アートイニシアティブ』BankART1929，2009年
齋藤純一『公共性』岩波書店，2000年
鹿野町誌編集委員会『鹿野町誌　下巻』鹿野町，1995年
清水裕之『21世紀の地域劇場―パブリックシアターの理念，空間，組織，運営への提案』鹿島出版会，1999年
清水裕之「公共ホールの運営と劇場法を考える」『演劇人　特集　公共劇場の現在』19号，(財)舞台芸術財団演劇人会議，2005年
新訂郷土読本編集委員会『新訂郷土読本　わたくしたちの鹿野』鹿野町・鹿野町教育委員会，2005年
Yeoman，I ed. *Festival and Events Management*，Elsevier Ltd 2004
吉本光宏「アウトリーチ整理学」『地域創造』Vol.14，2003年
ぴあ総研『エンターテインメント白書2006』ぴあ総合研究所，2006年

(2009 年10月7日受付，2009年10月14日受理)

アンケート調査結果抜粋

表11　観客アンケート集計結果　回答者属性

n=359		人数	構成比％	n=359		人数	構成比％
性別	男性	131	36.5	職業	会社員	81	22.6
	女性	224	62.4		公務員・団体職員	90	25.1
	無回答	4	1.1		会社・団体役員	10	2.8
年齢	10 代	24	6.7		自営業	18	5.0
	20 代	67	18.7		フリーランス	14	3.9
	30 代	58	16.2		農業・林業	3	0.8
	40 代	72	20.1		パート・アルバイト	22	6.1
	50 代	77	21.4		専業主婦	36	10.0
	60 代	37	10.3		小中高校生	19	5.3
	70 代以上	16	4.5		大学生	20	5.6
	無回答	8	2.2		専門学校	1	0.3
住まい	鹿野町内	28	7.8		無職	26	7.2
	（旧）鳥取市内	176	49.0		その他	12	3.3
	旧 7 町	36	10.0		無回答	7	1.9
	鳥取県内	69	19.2	「鳥の劇場」来訪経験	今回が初めて	131	38.5
	鳥取県外	46	12.8		来たことがある	189	48.5
	無回答	4	1.1		無回答	20	5.9

表12　観客アンケート調査結果

質問	選択肢	構成比 %	人数
公演前後にどこか立ち寄りますか？（単数）n=340	1. はい	34.5	124
	2. いいえ	61.6	221
	3. 無回答	3.9	14
公演前後に立ち寄った場所（複数回答）n=124	1. 鹿野おもしろ市場	16.9	21
	2. そば道場	14.5	18
	3. 温泉館ホットピア	14.5	18
	4. 夢こみち・夢本陣	25	31
	5. しかの心	21.8	27
	6. 城山公園	17.7	22
	7. 鳥取砂丘	8.9	11
	8. 三朝温泉	2.4	3
	9. 三徳山	2.4	3
	10. その他	29.8	37
	無回答	0.8	1
鳥の演劇祭の目標で大切なのは？（複数回答）n =340	1. 演劇祭を通じ，鹿野町の魅力を広く発信する	111	32.6
	2. 県内外から大勢の観客が訪れ，鹿野町がにぎわう	99	29.1
	3. 祭りならではの楽しい雰囲気で，演劇に親しむ	115	33.8
	4. 子どもたちがワクワクするような芸術体験ができる	147	43.2
	5. 県や市が，芸術や文化に熱心に取り組むようになる	164	48.2
	6. 生の舞台の迫力に触れる	247	72.6
	7. どれが大切かわからない	6	1.8
	8. どれも大切とは思わない	0	0
	9. その他	16	4.7
	無回答	22	6.5
総合的に見てのご意見をお聞かせ下さい。(単数回答) n =340	1. とても満足している	32.1	109
	2. 満足している	49.4	168
	3. 普通	5	17
	4. 不満である	0.3	1
	5. とても不満である	0	0
	6. その他	3.2	11
	7. 無回答	10	34
	合計	100	340
これまでの鳥の劇場への来場経験は？（複数回答） n=340	演劇やダンスなど公演を見に来たことがある	165	48.5
	今回が初めて	131	38.5
	公演以外のイベントできたことがある	28	8.2
	それ以外の用事で来たことがある	28	8.2
	無回答	20	5.9
	その他	6	1.8

出演者アンケート調査結果（抜粋）

表13　出演者プロフィール

（　）は，配布数		合計 (48)	にんぎょひめ(16)	青年団 (32)
回答者数（人）		44	16	28
性別	男	25	9	16
	女	19	7	12
年代（SA）	20 代	11	4	7
	30 代	16	2	14
	40 代	12	6	6
	50 代	2	2	0
	60 代	3	2	1
役割（SA）	俳優	24	5	19
	演出家	1	0	1
	制作	3	1	2
	舞台監督	3	1	2
	照明	4	2	2
	音響	2	2	0
	その他	8	5	3
経験年数（SA）	3 年未満	1	1	0
	5 年未満	1	0	1
	10 年未満	10	3	7
	10 年以上	31	12	19
演劇祭参加経験	無し	9	1	8
	有り	35	15	20

表14　出演者の満足度（５段階評価　１に近いほど満足感は高い）

項目	全体	にんぎょひめ	青年団
１．事前の連絡状況	2.3	2.6	2.1
２．劇場設備	3.1	3.9	2.6
３．劇場スタッフの対応	1.3	1.4	1.3
４．演劇祭への参加条件	2.2	1.6	2.1
５．ボランティアスタッフの対応	1.4	1.4	1.3
６．チラシなどのデザイン	1.5	1.5	1.5
７．集客状況	1.4	1.4	1.4
８．劇場の雰囲気	1.4	1.9	1.2
９．演劇祭全体のプログラム	1.8	2.3	1.6
10．宿泊施設の快適さ	1.5	1.8	1.4
11．地域のホスピタリティ	1.5	1.6	1.4
総合的にみて	1.5	1.7	1.4

町民アンケート調査結果（抜粋）

表15　属性別回収数と実数

	性別	回収数	構成比％	鳥取市統計	構成比％
性別	男性	849	46.6	1, 811	47.4
	女性	935	51.4	2, 013	52.6
	無回答	36	2.0	−	−
	合計	1, 820	100.0	3, 824	100
年齢	10代	80	4.4	263	6.9
	20代	164	9	416	10.9
	30代	195	10.7	398	10.4
	40代	225	12.4	466	12.2
	50代	385	21.2	718	18.8
	60代	310	17	565	14.8
	70代以上	440	24.2	998	26
	無回答	21	1.2	−	−
	合計	1, 820	100	3, 824	100
地区	鹿野地区	975	53.6	1, 687	44.1
	小鷲河地区	291	16	694	18.2
	勝谷地区	554	30.4	1, 443	37.7
	合計	1, 820	100	3, 824	100

表16　回答者属性

	選択項目	人数	構成比％
職業	1．会社員	480	26.4
	2．公務員・団体職員	144	7.9
	3．会社・団体役員	41	2.3
	4．自営業	111	6.1
	5．農業・林業	216	11.9
	6．パート・アルバイト	163	9.0
	7．専業主婦	123	6.8
	8．高校生	66	3.6
	9．大学生・短大生	6	0.3
	10．専門学校生	6	0.3
	11．無職	391	21.5
	12．その他	27	1.5
	無回答	46	2.5

	選択項目	人数	構成比％
居住年数	１年未満	8	0.4
	３年未満	37	2
	５年未満	30	1.6
	10年未満	127	7
	20年未満	190	10.4
	30年未満	287	15.8
	30年以上	1103	60.6
	その他	8	0.4
	無回答	30	1.6
通勤通学先	鹿野町内	343	18.8
	鳥取市内	632	34.7
	鳥取県内	117	6.4
	鳥取県外	13	0.7
	通勤・通学はしていない	527	29.0
	その他	24	1.3
	無回答	164	9.0